

1. 報 告

特 産 品 に よ る 地 域 開 発

宝 田 喜 美 男

青森県の田子町役場の宝田と申します。

きょうの私の報告のテーマが「特産品による地域開発」ということで、具体的に言いますと、にんにくによる地域おこしを私の町ではやってきました。私は役場におりまして、それらの活動を行政の方から見てきたわけです。

1. 田子町の概況

まず最初に、町の現況から触れていきたいと思います。田子町は戦前から戦後にかけては、雑穀とか、炭を生産していた地帯だったわけです。そういう地帯で何とか所得を上げたいということで、開田ブーム、あるいはたばこの導入、そういうことがありました。その中で、米、リンゴとか、肉牛が最初入ってきたわけです。中山間の地帯で、冬は雪があるということで、出稼ぎが非常に多い地帯でした。それをどのように減らすかが一つの課題であったわけです。同じ青森県でも、津軽と南部とありますけれども、日本海側と太平洋側は大分違ひまして、日本海側の方は米とリンゴの産地、県南の方は、今でも野菜とか、雑穀などを昔から作っていました。

やませの常襲地帯でもあるので、野菜が入ってきやすい土壌にあったということもありまして、たばこ、あるいはにんにくが入ってまいりました。これが冬期間の出稼ぎを減らしたわけです。つまり、冬の間ににんにくの出荷等の作業がある。あるいはたばこの調整作業があるので、たばこにんにくが入って

きてからは、出稼ぎがとて少なくなってきました。そういうようなこともありまして、野菜がどんどん伸びてきて、米の比重を上回ってきて、今現在では、野菜が15億円ぐらい、米が7億から8億円ということで、米とにんにくの生産高が大体同じぐらいになってきました。昭和44年ににんにくを導入しましたので、導入から約20年かかっているわけです。そういう過程の中で、ようやく米から脱皮しつつあるというのが現状です。

2. 農業生産の課題

このように、農業の姿が変化しているわけですが、順調にいっているかということ、必ずしもそうではなくて、問題もあるわけです。夏場の野菜がかなりふえてきてまして、農協の方でも、トマト、キュウリ、枝豆、そういうようなものをどんどん推進してきたわけですが、他の地域でもそうかと思えますけれども、労働力の不足で、特に夏場はどうにもならないような状況になってきていると思います。要するに、お金には非常になるわけですけれども、うちの方は、夏秋キュウリ、夏秋トマトということで、7月下旬から8月いっぱい労働力のピークでどうにもならない。そういうことで、栽培面積も頭打ちになっております。

トマトについては、共同選果で、若干は省力化もできておりますけれども、キュウリについてはできない。いぼが取れたりというようなことで、なかなか難しい。枝豆について

は、普通のもぎ取り式の枝豆じゃないものですから、逆に言うと、それで価格を有利に販売しているということもありまして、省力化しないことによって、値段の高いものを維持しているような状況でもあります。したがって、これがちょっと問題だということでもあります。

長期的な問題としては、これは全国的な問題だとも思いますけれども、新規の就農者が非常に少ないということですね。これは、長期的に見た場合の労働力の不足というような問題で、これはどうしようかなというのが正直なところだと思います。

2 番目に指摘できることとしては、機械、施設への個別投資が依然盛んであるということです。これは、うちの方の場合は平野地帯じゃないものですから、水田の状況としては、圃場整備もそんなには進んでいないこともありまして、農協がカントリーをつくるだけの面積もない。そういうことで水稻の共同利用組織がなくて、個別対応が多いわけですね。

したがって、特に水稻については、依然そういう個別投資が非常に盛んだということがあります。これについては、平成5年ぐらいにはライスセンターの設置と同時に、そういう組織化をやるということで今計画中ですけれども、現状ではまだそういう個別投資が盛んです。

3 番目としては規模拡大の問題です。これは所有権の移動とか、利用権の設定という問題で、これはそんなに進んでいません。

3. にんにく栽培の導入

そういう状況の中で、にんにくに注目が集まってきたわけですし、それをいろいろな形で利用できないかという様なことを考えてきました。

これはどういうところから始まったかと言いますと、昭和60年に、田子町の第三次総

合計画ということで、タプコピアという10年計画をつくったんです。この中で、我々の誇れるものは何か、あるいは自慢づくりは何かということを考えたわけなんです。

そこで、うちの方の場合はにんにく、これしかないということになりまして、にんにくに一つこだわったまちづくりをしてみようということになりました。いろいろな意味で、我々自身も、にんにくをよく知らないということもありまして、やっていく中で、にんにくというのは、すごい物だなというのが今日わかってきたわけですね。じゃ、ひとつにんにくにこだわって、にんにくとは何ぞやということをやってみようということになりました。

ここで田子町のにんにくの歴史なり、問題点、あるいはにんにくをどのように利用してきたか、にんにくというのはどういうものなのかということこれからちょっと述べてみたいと思います。

うちの方のにんにくの歴史は、37年に初めて種を導入して、44年ににんにく生産部会ができました。その当時、生産高は300万円ぐらいだった。それが51年に2億7,000万円、56年に6億円、62年に7億円、平成3年に8億円という形で、伸びてきました。そういう中で、自然乾燥から強制乾燥の方式に技術的には切りかえてきた。あるいは昭和62年に、そのころから掘取機を導入するなど、技術的な転換もしてきました。にんにくをそういう形で昭和44年から、20年ちょっとかかったわけですが、現在は約8億円にまでなっているわけです。

にんにくの産地として、昭和53年ごろに「にんにく日本一」ということを掲げました。現在はどうかというと、同じ青森県の中で、十和田市、あるいは天間林村というところは、面積ではうちの町を上回っているということです。

日本一じゃないじゃないかという話もちろはら出まして、うちの方では、そうじゃない

んだ。にんにくのいろいろな総合評価がありますけれども、面積なり、品質なり、量なり、加工、あるいはいろいろなにんにくの生産技術なり、食文化に関すること、情報、にんにくの集散地とか、そういうにんにくの総合的な評価として日本一なんだ、そういうようなことを言っているわけです。現在は、面積や量といった面でいくと、日本一じゃないかもしれないということはわかっていまして、現在はそのような言い方をしています。

にんにくについても、非常に問題はあります。まず面積の伸び悩みの問題ですね。これは、結局労働力の問題とか、連作障害の問題が絡むわけですが、あるいは種子更新ですね。これはウイルスフリー苗の増殖をやっているわけなんですけれども、これがいろいろ民間の企業との問題、一部、増殖過程で問題があるということもありまして、更新が若干おくられている。あるいは連作障害の問題、堆肥の不足の問題ということがあります。

堆肥については、堆肥センターを町と農協で第三セクターをつくりまして、年間4,000トンぐらいの生産体制をつくりまして、今後は堆肥の問題は克服できるんじゃないかと考えています。

労働力の問題については、収穫の7月上旬、播種の9月下旬に、労働力が集中するという問題で、これは、ほとんど岩手県や、秋田県の一部から、どんどんそのときは日雇いみたいな感じで入るんです。そういうようなことで何とか処理していますけれども、これも非常に難しい問題だと思います。

傾向としては、1戸当たりの経営規模が大きくなって、栽培戸数はふえていない。若干減りぎみですが、1戸当たりの経営面積の拡大が進んでいる、そのような感じです。一応にんにくの問題点は、そういうようなことがあると思います。

4. 「にんにくシンポジウム」と 「にんにくべこ祭り」

にんにくをいろいろな形で、我々自身が考えて分析してみて、にんにくというのはどういうものか、あるいは本当にすごい物なんだろうかということをやったわけなんです。それは、一つは、「にんにくシンポジウム」ということで、これが昭和60年の10月にやったわけですけれども、にんにくをいろいろな角度から見詰め直す絶好の機会となったということです。生産、販売、加工、食文化、そういう分科会をつくりまして、そこでそれぞれ討論して、あるいは実演とか、そういうようなものもやったわけです。このときは、東京大学の樺山紘一先生に、シンポジウムの基調講演をしてもらいました。それから、にんにくのおかげで、卓球の世界チャンピオンになったという河野選手、あと東京の市場の方とか、料理研究家の方とか集まってもらいまして、これを通じて、生産者や、町民自身が、本当にうちの方はにんにくは日本一何だろうとか、あるいはにんにくというのは、こういうものなんだろうかというのがよくわかったんじゃないかな、ある意味で自信がついたんじゃないかなという感じがしたわけです。結局、魔よけとか、香辛料とか、強精剤とか、野菜には違いないんですけれども、普通の野菜とは非常に違うんですね。そういうことをよくわかっていなかったと思います。

その後、にんにくとべこまつりを、このシンポジウムをきっかけでやることになったわけです。うちの方では、にんにくとべこが、一つのセットで入ってきたという経緯があります。これはなぜかという、にんにくの場合、かなり大量の堆肥を使うということで、うちの方は、昔から肉牛に関しては、子取り、いわゆる繁殖でやってきましたので、現在でも1,200頭ぐらいの子取りの繁殖、黒毛和

牛ですけれども、いますので、これの堆肥があるおかげで、にんにくができたという長い歴史があります。

にんにくとべこはセットでやってきた。夏の間は野菜なんかをつくって、あと牛は牧場に放牧するわけですね。後で、夏山冬里で、冬になると、また自分の家へ連れてくる。そういう形でもやっていましたので、そのにんにくとべこはセットだというのは、我々自身も思っていました。

うちの特産のにんにくと田子牛、黒毛和牛の丸焼き、これは半身ですけれども、丸焼き、バーベキュー、にんにくの加工品の販売をやりまして、それを61年の9月からずっと毎年やっています。62年からは、アメリカのギルロイ市という世界一のにんにくの都市ですけれども、そこからガーリッククイーン、にんにくの女王様ですね、それを毎年招待して、花を添えているということです。

あと、平成3年ですけれども、これはアメリカとイタリアと韓国から呼びまして、そのそれぞれのにんにく料理を実演してもらいました。ちなみにアメリカは、エビのにんにく炒めみたいなのをやってもらった。イタリアでは、これは、オリーブオイルでにんにくを揚げて、それにパスタをつけるポピュラーなもの、それをやってもらった。韓国の方はキムチの実演、これは普及所のご婦人の方ですけれども、そういう形でやってもらいました。

次に「町民塾」というものがあるんですけれども、これが61年の8月からやってきているわけです。これは、にんにくのシンポジウムのときがご縁で、東大の樺山先生を塾長にして、自主的に学習とか、実践をやっています。構成は農家の方、あるいは商店、主婦、いろいろな方が入っています。自分の町のことを、自分たちで考えようということでやっているわけです。いろいろなところに農民塾とか、いろいろなものがありますけれども、

そういうものだと思っていただければよろしいかと思います。

それで、去年からはにんにくとべこまつりの運営も、自分たちにやらせてくれということで、企画、運営を全部彼らに任せています。それから、自分たちでまちづくりのシンポジウムを開催したり、あるいは東京大学の一入入学とか、そういうようなことを自分たちで考えながらやっているということで、これもずっと継続してやっています。今は第3期生になっています。第1期生は57名で、第2期生が37名、現在第3期目で22名がやっています。

5. にんにく姉妹都市

もう一つがにんにく「姉妹都市の締結」ということです。これは「国際にんにくネットワークの構築」とも言えると思いますが、我々がにんにくをつくって売っていく中で、どうすればうちのにんにくを一番高く売れるか、あるいは消費者に「田子のにんにくと言えば、これいいだね」といってもらえるかということを考えてわけなんです。そういうことを考えていくと、やっぱり田子のにんにくは日本一だということを証明するというのが非常に大変なわけですし、これは、自分が日本一だと言っても日本一になれない。そこで、これをアメリカから証明してもらおうということを考えてわけです。つまり、ギルロイ市はやはり世界一のにんにくの集散地なわけです。そこ、小さいけれども、うちは日本一だと言って、向こうに行って握手したわけなんです。そうしたら「おまえのところは日本一か。うちのところは世界一だ」ということで、世界一のところと日本一のところを結んで、相手から「日本では田子というのがあるんだ」ということを証明してもらおうという作戦を立てたわけなんです。

これは、農協さんはいろいろ生産とか、販

売の方で頑張っていましたので、行政側としてできるのは、そういうギルロイ市や、ほかのいろいろなところと結んで、周りからだれが見ても「にんにくと言えば田子だ。ああ、田子のにんにくは日本一なんだ、やっぱり違うんだ」ということを、周りが認めざるを得ないような状況をつくってやるのが、我々の仕事じゃないかということを考えたわけですね。それで、たまたまギルロイ市が浮かんできたということです。

私は最初に、たしか1987年ですか、そのときにギルロイ市に行きまして、そこのガーリックフェスティバルを見たらびっくり仰天で、3日間で15万人集まるということで、今、アメリカの5大祭りの一つにはなるらしいです。その運営たるや、簡単に言えば、にんにくの何か入った食べ物の店がいっぱいあって、みんながにんにくの何かそれを食って、あとビールとか、コーラを飲んで、踊って、ワイワイ楽しんで帰る。それを3日間やるわけですね。

そういうお祭りなんですけれども、全部、必ず食べ物がにんにくに関係があるんですね。あるいは売っているお土産品が、全部にんにくに関係があるわけです。香水もにんにく入りの香水なわけです。シャツが、全部そのにんにくのマークが入っている。あと、首飾りがにんにくの首飾り、要するに、それはアメリカ人のユーモアなんですね。だから、にんにくのイヤリングとか、これは女の人がよくやっているわけですね。

また、運営の仕方全部ボランティアでやる。ボランティアでやるといっても、結局高校生とか、一般の方がグループで参加して、そのグループの参加した時間を、収益金が出たものを、そのグループに還元してやっているわけですね。そうすると、グループの活動資金ができるし、日本で言う完全なボランティアではないと思うんですけれども、そういうような形で運営している。自主運営ですね。

市は一切関与しない。そういう形でそれを処理しているのを見まして、我々の方が、そういう意味でいろいろ勉強になるということが非常に多かったわけです。

それで、何とかギルロイ市にねらいを定めて、ここと何かの関係をつくりたいと考え、「クイーンを招待したい」と言ったら「来る」と言うんで「ありがとうございます」ということで、非常にその辺はラッキーだったんです。うちの方に招待してから、向こうの市長さんもお見えになる、あるいはこちらからもうちの町長が行ってということで、87年に行って、88年には姉妹都市と、非常にとんとん拍子にいったということです。

田子町の高校生を5月にギルロイへ派遣しています。もちろん農業高校からも、毎年最低一人はやるということで、その中で、ギルロイ市に行っているいろいろな体験して、そのおかげで推薦入学で、農学部に入るという子もいるようです。非常にそれはいいんじゃないかなと思っています。

あとは、ギルロイ市から職員を去年の5月から採用しまして、うちの方に置いております。また、英語の指導助手が、中学校を中心にほかにもいるわけですね。うちの方の彼には、一応小学校とか、保育所とか、あるいは役場の中にいて、いろいろなことをしてもらうということをやっています。毎年、ギルロイ市とは、向こうではガーリックフェスティバル、うちの方にはにんにくとかべこまつりがあるということで、毎年、お互いに祭りを訪問するということになっています。

あとモンテチェリ、これはイタリアなんですけれども、ここはミラノの近くにピアチェンツァというのがあります。その近くなんですけれども、ここがイタリアの白いにんにくで有名だということで、これはギルロイ市と姉妹都市だということを知りまして、去年、そちらで、にんにくまつりがあるから来てくれということで行ったわけなんです。そうし

たら、人口が5,000人ぐらいの小さい町なんですけれども、にんにくは、種用のにんにくを主につくっているわけです。ほとんどイタリアの全土に、種用のにんにくをここでつくって供給しているということで、にんにく自体は、見ればそんなすごい生産量ではないなと思いました。

ただ、1戸当たり、イタリアのここでさえも30ヘクタールぐらいはつくっている。だから、アメリカには及ばないにしても、イタリアでも1戸当たり30ヘクタールつくっている。うちの方ではせいぜい大きい農家でも1ヘクタールとか、そんなものですから、これはどうしたものかなということで、ヨーロッパを目指すにしても、これは大変だなというのをちょっと感じて来ました。

ここのお祭りは、全然アメリカと違って、日本で言う文化祭みたいなものですね。それにただにんにくが並べてあって、みんなが買っていきますね。そういうような感じのお祭りで、非常におとなしいお祭りでした。ヨーロッパですから、非常に古い歴史があるので、ルネサンスのころに建てられた城壁とか、教会とか、そういうようなものの中で、にんにくを即売したり、そういう文化祭みたいなのをやる。そういうようなことで、ここの交流も重要だなということを考えているわけです。これは、またアメリカとはちょっと違うなという感じです。

3番目は、韓国の瑞山郡ですね。これは忠清南道になりますけれども、ここがまたにんにくが1,000ヘクタールぐらいありますね。韓国では一、二位を争うかなりの産地だということで、ここも行ってきました。要するに、にんにくを1人当たりの消費量で言えば、世界的に中国とか、韓国ということだと思います。

6. 町の地域振興方策

そういうようなことで、アメリカ、あるい

はヨーロッパ、アジア、そういうところと日本と、こういうものを結んじゃって、にんにくのネットワークで結んで、いろいろな情報が入るようにしておくということを考えています。これは、ある意味で、特に日本がアジアに対して、いろいろな問題があるんですけれども、特に韓国のいろいろな問題が今あります。ここをひとつクリアすることが必要だということで、ある意味で交流の仕方が非常に難しいんですけれども、やはりアメリカも、ヨーロッパも、アジアもみんなつき合えなければ、これはだめじゃないかなと思います。

その一環として、町の施設として「ガーリックセンター」を建てようという計画が立てられ、今、工事が始まっています。これは農水省の構造改善事業の補助事業として認めていただきましたけれども、うちのにんにくのPR、あるいはにんにくの食べ方なりを広めることを一つの目的としています。全国的なにんにくの消費というのをどんどんふやすために、いろんな調理法が普及しないと思います。

それとの関連で、にんにくの加工品、これは、非常に日本は少ないんですけれども、ギルロイ市に行ったら、恐らく100から200ぐらいはあるという感じでこの前見てきました。そういうようなにんにくの料理ですね。そういう仕方を教える、あるいは加工品を紹介するという一つの拠点にしたいということで、「ガーリックセンター」の設計も普通のものではつまらないと考えました。そこで、できればギルロイ市の世界一のにんにく産地の雰囲気を出したいということで、設計をカリフォルニアのジョージ・ホイという人に頼みました。

この人はサンタクルーズに住んでいる人なんですけれども、先月、最終打ち合わせに来まして、私も彼といろいろ話をしました。わざわざ今つくりつけのキャビネットを全部、向こうのクルミ材で仕上げるということで、

その打ち合わせとか、あるいは色をどうする、材質をどうする、そういうようなものを全部やったわけなんです。

また、ギルロイ市でつくっております加工品、これを百、二百ぐらいを入れまして、うちの方でつくっています加工品もあります。そういうのを一緒にセットで売っていくということで、弾みをつけたい。あるいは年間、イタリアとか、韓国、アメリカの料理のフェアを一応決めまして、その中で、アメリカのにんにく料理の紹介とか、イタリアのにんにく料理の紹介の期間とか、そういうのを実際に本場の人を呼んで料理してもらおう。そういうようなことを計画して、平成4年、ことしの秋口までにはオープンしたいなということで考えています。

あと、そのほかに「にんにく加工場」と書いていますけれども、これは、四国のある工場が、うちの方がにんにくの産地だということで来まして、にんにくの入浴剤をつくり始めました。これは武田薬品から出ていますシャンプーとセシルから出ています健妙泉、それをうちの方でつくっています。これは、大体年間加工で600トンですね。うちの方で350トンぐらい、あと県内のほかの町村から250トンぐらい集める。そういうことで、情報発信していたおかげで、そういう企業が来まして、非常に地元に貢献してもらっています。

これが大体にんにくの今までの動きです。最近、その他の新しい動きとしては、今はやりの特別栽培米です。うちの方は有機低農薬米を3、4年ぐらい前からやりまして、除草剤1回、あとは殺虫剤が1回だけです、そういう形で決めましてやっています。これが特別栽培米ということで、県内の生協、あと、自主流通米で千葉県の生協に出荷するという形で行っています。

そのほかに、一応県内の生協さんでは、うちの農協でミルクプラントを持っていますの

で、そこで成分無調整の牛乳をつくってくれということで、そういうようなものの供給も行なっています。あるいは自生するフキ、そういうものをそのままの形で欲しいということで、それを供給したりということで、生協との関係は、年々拡大する方向で行っています。

それから、大規模区画の圃場整備についての動きがあります。これは、千葉の有名な兼坂さんの方式ですけれども、これをひとつやってみた方がいいんじゃないかということで、2、3年前から始まって、うちの方でもやっています。

全部は兼坂方式は使えないですけれども、部分的に使うことになっています。非農用地の創設は、公共用地で創設できる部分があるんじゃないかということで、農村公園とか、集会所を建てる計画がありましたので、そういうものはとにかく公共用地で高く買うから、その分を出してくれという形で出させて、負担金を減らす方向でこれもやっています。

あるいはこれからの話ですけれども、CATVということです。大分県の大山町では、農村型のCATVをやっていますけれども、うちの方でもそういうCATVの計画があります。平成6年にオープンする予定で、これは農村型でやろうということでやっています、実際の圃場での青空教室とか、圃場巡回をテレビでもやる、あるいは漬物の講習をCATVでできる、英語会話もCATVでできるということで、自主放送を大体メインにしたものとして考えています。

大山のたしか緒方さんという方にお話を聞いたんですが、CATVがあるおかげで、いろいろな人物の発掘ができる。例えば、ダイヤモンドの原石はいっぱいあるけれども、磨かなければダイヤモンドにならないと言うんですね。農村型のCATVだと、そういう人材の発掘ができると言うんですね。言われてみると、例えば梅干しを漬ける日本一のおば

あちゃんがいる。その人にスポットを当てて CATV でやると、そのおばあさんはたちまち有名になっちゃう。いろいろなそういう形で町に貢献していく。そういうことが CATV でできるんじゃないかということで、うちの方は当初、パソコンネットワークで、パソコンで全部結んじゃおうという計画を組んだんですけども、やはりパソコンでは、そういうことはできないだろう。もし金があるんだったら、CATV の方がいいなということで。たまたま大山のそういう話も聞きまして、うちの方でもすばらしい人材がかなりいるんですよ。そういう人に、これから主体的にまちづくりとか、あるいは生産なり、そういうところでいろいろな現場で働いてもらわなければ困りますので、そういう人にもスポットを当てて、ダイヤモンドの原石を磨いて、ダイヤモンドにする。そのためにその CATV を使おうと考えています。

そういうようなことで、にんにくを使っていろいろやってきた。うちの町長がよく言うんですが、偉大な田舎をつくりたいということで、にんにくにこだわってきたわけです。まだまだにんにくには、魅力といいますか、いろいろあります。わからない面もありますけれども、たかがにんにく一つとってみても、いろいろすごい物だ。我々も、こんなににんにくはすごい物だなとは、正直言って思っていませんでした。

そういうことで、将来的には、人材の育成が根本的には必要になるので、うちの方の地域においても、地域を担う若者をどのようにして育成するかということが、農業であれ、商業であれ、共通した問題なので、それをひとつにんにくを使ってやりたいということでやってきたわけです。これからもそういう形で、にんにくを手段としていろいろ使っていきたい。まだまだ手段としての有効性があると思います。

一応時間が来たようですので「特産品によ

る地域開発」ということについての、私の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○ 具体的な農業の担い手の農家のことについてちょっとお聞きしたいんです。にんにく農家が、今、部会に 580 名、258 ヘクタールつくっておられるんですけども、このにんにく栽培農家と、ほかのいろいろな作物をつくっている農家との関係ですね。それがどういう形でにんにくに、どういう具体的な農家層がやっておられて、ほかの農作物との関係はどうかというところをちょっと教えていただきたいんですけども……。

宝田 うちの方で、にんにくを主な所得で食っているという農家は余り多くないと思うんですね。結局、販売の主要期間が冬であるということで、農家の方でもよく考えて、要するに冬場の労力を有効に使いたいという形で、にんにくが入っています。ですから、もし夏場に、ほかのメーンの作物に影響ある形で、にんにくがあるのであれば、にんにくはやらないんですよ。

だから、夏場の基幹作物とは何かというと、やはりトマトとか、キュウリ、たばこですね。これに影響のない範囲で、夏場のにんにくの栽培面積が決まっていると言えばおかしいですけれども、そういう形になっていると思うんです。

品質が悪い物、今は大玉指向なんで、結局 LL, L, M, S とありますけれども、LL の率が悪い農家は、収益性が非常に少ないわけです。そういう農家は余り無理してやらない。要するに、規模をふやしちゃって、新しい畑にやると、要するに LL 玉はとれないわけです。にんにくは、5 年とか、7 年たって、土がよくできると、大玉がとれるわけです。そうすると、無理してふやして収益がない。それじゃだめだということで、余り成績が悪い農家はやめて、いい農家が残って規模

を広げていくという形がふえてきていると思います。

○ 4点ほど質問があります。一つは、野菜等の労働集約的な作物を入れようとする、どこでも労働対策に困っているんです。労働対策に困っているというお話を聞かせていただいたんですけれども、それに対して、今後どのような解決策を見出していくかということについてお伺いしたい。第2点は、水田のにんにくもかなりあるようで、しかもこれは転作等も影響しているかと思うんですが、水田に植えているにんにくの中で、転作田のウエートはどのぐらいでしょうか。転作で、奨励金が全くなかったら、にんにくの収益等にどう影響して、田子町のにんにくは、いかなる影響を受けるだろうかというのが2番目の質問でございます。

第3点は、新規就農者の確保がどこでも難しく、またどうやって確保していくかという問題が出てくるかと思うんですが、新規就農者の確保について、具体的に地方として何か、例えば奨学金でも出したりなんかして確保策みたいなものがあるのかどうか。

第4点は、加工関係もおやりになろうとしています、田子町の場合、加工の技術者養成というんですか、技術者教育みたいなものをどうやっておられるかをお聞きしたいと思います。

宝田 四つほど出ましたので、ひとつ簡単に答えたいと思います。

労働集約的な作物がいっぱい入っていて、それに対する対策は具体的にあるのかというのが1点目ですけれども、これは正直言ってないんですね。いわゆる出荷の問題が、かなり大きいウエートを占めていまして、今、結局それができないから、逆に高い値段で売れてお金取っているという面がありますね。ですから、具体的に外国人労働者を入れれば、一番簡単に要は解決するののかという問題もあります。その辺の問題も、正直言って、考え

ていることは考えているんです。ただ、具体的に、例えば今の場合、特にキュウリ、枝豆、こういうものについてどのように省力化できるか、あるいは具体策は今、正直言って、ないのが現状です。

外国人労働者の問題については、企業がいろいろやろうとしていますけれども、うちの方も、例えばもし研修生という形で、そもそも発展途上国の向こうの方に、技術移転をしてやれるような形でやれるんだったらやりたいなと、正直言って、私は考えています。ですから、やはり日本の農業の技術は、非常に高いものがあると思うんですね。そういう技術移転を向こうにしてやるような形の中で、研修生として受け入れて、うちの方もギブ・アンド・テイクでやれる形ができれば、これは将来的には可能じゃないかなと思っています。具体的に今の計画はありません。ただ、長期的にはそういうことは考えています。

2番目の水田転作ですけれども、にんにくのウエートは約3割ぐらいのもんです。うちの方は奨励金がなくても構わないと思います。というのは、にんにくばかりじゃなくて、転作については、米よりはもうかる、野菜の方がもうかるという形は大体できてきています。たばこにしても、にんにくにしても、枝豆にしてもですね。ですから、これは、奨励金が欲しいことは欲しいですけれども、奨励金がなくなったら、全部また田んぼに戻っちゃうかという、もう田んぼに戻れない面が非常に多いですね。ですから、結論から言うと、奨励金なしでもオーケーだと思います。

3番目に、新規就農者の確保についてですけれども、これについては非常にいいアイデアはないですね。正直言ってありません。これをどのようにやるかということで、新規就農者というよりも、Uターン現象をやるためのことを今やっているんじゃないかな。町長の考えはそうなんですけれども、結局、将来的に帰ってくる。高校を卒業してすぐつか

ないですね。一たんどこかの職場についたり、あるいは大学へ進学して就職して、帰ってくるにしても、それから帰ってくるという形がこれからもほとんどになる。

そういった場合の職場なり、抱え込むそういうもので何かないかということなんですけれども、うちの方では、第三セクターと、今の財団法人で、体験学習をやる。今そういうものを財団法人がつくるところなんですけれども、そこでは、若干抱え込めるかなということです。大した数ではないので、そういうような新規就農者を抱えるのも、具体策としては今ないです。いろいろ考えてはおりますけれども、具体策としてはないです。

ただ、財団法人でやる中で、体験学習とか、都市の交流をやるという形を考えていますので、そこは6月にオープンの予定なんです。その中で、一応業務はいろいろあります。ただ、まだ見えない部分が相当ありますので、その中で抱え込めるものは若干あると思います。

4番目に加工の問題ですけれども、非常にリスクが大きい。しかも専門的な技術者がなければやっていけないんじゃないかということで、全くそのとおりなんで、うちの方の場合は、さっき言ったようにリスクのないやり方で、逆に言うと、ハイリターンもないんですね。農協さんでは、要するに新規の作物を確実に入れて、農家の方にとらせる。ミニ大根とか、ミニカブは年間四、五回とれますが、そういう作物が今までなかったわけなんです。そういう作物を入れることができる農家層もあるわけです。

ですから、そういうところに今は一定の栽培面積を確保して、加工技術も、そちらの販売会社から、ある程度指示を受けてやるということで、農協の方では、注文生産みたいな感じになると思うんですね。これは委託加工になるか、注文加工になるかかなり違うんですけれども、一応うちの方は注文を受けて、

こういう形でつくってくれというのをつくる。そういうリスクが少ない方法でやっていますので、ですから、ハイリターンにはならないですけれども、一応そういう形でやっているということです。

○ 二、三お伺いしたいと思います。

畑作振興課です。ちょっと技術的になるかと思いますが、一つは、連作障害の克服という点が問題点として挙がっていました。特に畑作物の場合は、水田と違っていて、必ず連作障害という問題が出てきております。そういうことで、野菜、特産のにんにくにいたしましても、何年か後には産地が変わっていくという動きもございますので、田子町のにんにくににつきましても、そういう面での対応をどのように考えられておるのかなということが1点。

もう一つは、種子更新のつまずきという問題がございました。これは、多分成長点パイオの大量増殖の話をしたと思うんですけれども、差し支えなければ、どこの民間とやられておったのか、ちょっとお聞かせいただければと思います。

宝田 連作障害の方ですけれども、これは、分析していきますといろいろな要素があるわけで、いわゆる塩基分の問題、あるいはいろいろあるんですね。結局バランスが非常に悪くなっているということ、これは土壌調査を今やって、農協の方でやりました、あるいは弘前大学からもやまして、全圃場の土壌分析が大体終わって、報告書が今出ています。

その中で、やっぱりバランスが非常に崩れている。磷酸も過多に入れていますし、石灰もかなりずうっと入れてきています。ですから、微量要素が欠乏したり、あるいは石灰でも、カルシウムでも、いわゆる炭カル系統じゃなくて、そういう自然の、いわゆる溶解性のあるカルシウム分の方がいいとか、いろいろそういうところまで話がいったりしています。

基本的には圃場交換ですね。たばこ畑とにんにく畑の交換とか、あるいは今まで有機物質はかなり入っているんですね。入っているけれども、いわゆるほとんど未完熟のものが入っているんですね。そういう時期がありましたので、いわゆる完熟堆肥ということで、微生物性の改善ということで、数年前から微生物剤の投与とか、それを使った完熟堆肥の指導とかをやってきたわけです。

今現在は、堆肥センターでそういう完熟の堆肥をつくるということで、好気性発酵の完熟堆肥をつくる。そういうシステムのにも万全な体制でやっています、その堆肥を使うと大丈夫だ。あるいは一般の農家が使う場合でも、そういう微生物剤を使ってやってくれということで、連作障害の方は、そういう形でクリアはできると思います。

ウイルスフリー苗の増殖計画は、我々の方で網室をつくって、倍々とか、3倍、4倍に

ふやしていく。それを更新するという計画を立てたわけですが、それが、ある配布先から、変な病原菌が付着してきたということでつまづいたということで、向こうの圃場の土に問題がちょっとあったということですね。そういうような基本的なミスがありまして、並行していたそのウイルスフリーじゃなくて、優良種苗もあるわけですね。ウイルスに感染しながらも、肥大性がいいというものもありますので、そういうものを農家の方で個別に選抜する方式とか、並行してやっていたので、そちらの方と今は並行してやっています。

ですから、こっちの完全なウイルスの転換はちょっとつまづいていますけれども、一応優良種苗の方の弱ウイルスに感染しながらも、発育性はいいというものの切りかえは一応いっています、そういう状況です。